Teku-Teku
FEATURE

雨畑硯（あめはたすずり）

七百余年にわたり愛されてきた和硯の銘品

雨畑硯の材料となる原石は、
墨をする際にやすりの役割を果たす
硯面の粒子「鋒鋩（ほうぼう）」が細かく均一なことから、
硯に最適であるといわれてきた。
そして、その原石と向き合い、
魂を込めて彫り続けてきた職人たちがいる。
伝統を受け継ぎ守り抜く信念と、
未来につなげる地道な努力、斬新な発想力。
その目に、そして手に宿る職人それぞれの熱き思い。
心を映す硯の世界がここから生まれる。

Teku-Teku
FEATURE

日本人の美意識と硯

硯とは自分の内面と向き合う精神の器

甲斐雨端硯本舗・雨宮弥兵衛は、
元禄3年の創業以来、320年以上にわたり、その技を伝え続けてきた老舗。
13代目となる雨宮弥太郎さんは、東京藝術大学で彫刻を学び、
卒業後は海外の美術動向などにも影響を受けながら、故郷に戻り硯作家となりました。
一目で人の心を捉える、現代彫刻としての硯について、弥太郎さんが語ります。

甲斐雨端硯本舗・雨宮弥兵衛

雨宮 弥太郎さん

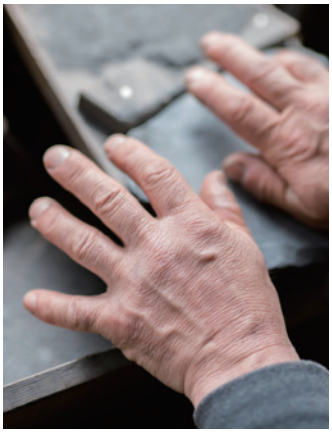
国民栄誉賞を受賞した将棋の羽生善治氏と囲碁の井山裕太氏に記念品として贈られた硯を制作。「勝負の世界に向き合う精神と、いかに内容を深めていくかという信念は、ものづくりの世界とも共通するものだと感じ、リスペクトを込め品格のあるものを作りました」と弥太郎さん

弥太郎さん制作の硯「蝶想硯」(15.0×24.2×3.7cm)

芸術と工芸に境はない。硯は精神を込めた現代彫刻。

「芸術の道に進む上で、アメリカの作曲家・ジョン・ケージの作品『4分33秒』※に大きな影響を受けました。作品が作品として成り立つためには自分が能動的に何かを得て、それに意味を見いだすことが必要なのです。そして肝心なのは、自分がその世界とどう関わるかということです。学生時代にこのような芸術に触れたことで、何のために物をつくるのかを意識するようになっていきました。

大学で彫刻を学び、ある程度の自信を持って家業に入りましたが、簡単にはいきませんでした。硯はただ面白い形だけでは良い物にならないことを実感したんです。当時、私の中では、芸術と地場産業的な工芸は別物だという感覚がありました。しかし今となってみれば、そんな境目は全く無意味だと感じますし、自分にとって硯は現代彫刻だといえます。硯は、実用的な物である一方、墨をすりながら自分の内面と向き合う精神的なオブジェでもあります。そんな硯を作るためには、いかに精神を込め深く追求していくかが求められるのです」



雨畑硯を彫り続けてきた武骨な手。「ものづくりをする人間として、この手を誇りに思っています」と弥太郎さん

一つの素材との出会い。自分と素材とが関係し合って形は作られていく。

「雨畑硯の原石が採れる辺りは山深く、そこにたたずんでいるだけで、森の空気や大地の息吹といったものが自分の中に入ってくるように感じます。また、それは石の中にも込められているわけで、自分のイメージと、石が持つ歴史や存在感などが関係し合って一つの形になっていくのです。雨畑硯の魅力には、そういった地域性と密接な関係があると思います。この雨畑硯の素晴らしさを知ってもらい、硯が山梨の伝統工芸として存在していることを世に示していくために、私は、日本伝統工芸展にも作品を出し続けています。さらに海外にも広めていくために、見ているだけで心安らぐ禅ストーンのような感じで、実用性と同時に硯の造形的な魅力をアピールしていきたいと考えています」

文化を支えているというプライド。そして見つめる未来。

「今の子どもたちのほとんどは、石ではない樹脂製の硯と、墨汁を使っています。書道への興味を広げるという必要性もあるので否定はしませんが、私のところに体験学習に来る子どもたちの多くも、硯が本来何のためにあるのかを知らないというのが現状です。ですから硯を作るよりも硯で墨をする体感を重視しています。実際に墨をすってみた子どもたちからは『気持ちが落ち着く』『いい匂いがする』などの声が聞こえてきます。すった墨で、毎回『夢』という字を書いてもらっていますが、墨の色やにじみ具合など、墨汁で書くのとは違ういろんな『夢』が表現されることに、子どもたちも楽しさを感じてくれています。

漢字を使っている限り、手で書く魅力はなくならないと思います。つまり硯は日本文化の中で、なくてはならないアイテムであることは間違いありません。その中で自分が硯の作品を作り続け、そして広めていくことで、微力ながら日本文化を支えている、そういうプライドを常に持ってやっているんです」

甲斐雨端硯本舗・雨宮弥兵衛

富士川町鰍沢5411／TEL.0556-27-0107

※『4分33秒』はジョン・ケージが1952年に作曲した3楽章から成る楽曲で、休止を表すTACET（タセット）が全楽章で指示されていて、演奏者は何も演奏しない、というもの。「現代音楽」の一つであり多くのアーティストに影響を与えている。

Teku-Teku
FEATURE

硯文化を守り育む現代の名工

卓越した技能を持ち、その道の第一人者として厚生労働省の
「現代の名工」に選ばれた峯硯堂本舗 代表の雨宮正美さん。
大きなのみの柄を肩に当てながら体全体で彫る伝統的な技法は、
師匠である父親の姿から学び、体得。
原石を見て最初に抱いたイメージを追求して
形にしていく正美さんの作品作りは、
文字通り、石を見ると書いて「硯」となる、それこそが原点。
時代の変化を受け止める中で、
受け継いだ技を次世代に継承していく思いについて
正美さんに伺いました。

正美さん制作の硯「末広硯」(30.0×21.5×6.5cm) 表紙写真に使用

偉大な父の背中を追い硯の世界へ。

「家業に入ったのは昭和44（1969）年、高校を卒業した時でした。私は、父が硯を作る姿をずっと見て育ちました。伝統ある雨畑硯の製造販売業を営む家に生まれたからには、この仕事を継ぐのは当たり前だと思っていました。しかし、すぐに硯の作り方を教えてもらえるわけではありません。最初は、硯を磨く作業など下働きをしながら、父が彫る様子を見て覚えるだけでした。職人の技は見て盗む、ということです。のみは簡単には持たせてもらえず、ましてや貴重な原石は譲ってもらえるわけがありませんから、製品にできない不要な石を削ることから始めたんです。そのころは、製品の箱詰めや発送の作業をしたり、問屋に行って注文を取ったりもしました。作るだけじゃなく、お客さんと会話をしたり、営業全般に携わったりしたことで、情報も得られ勉強になりました。そうした経験があったからこそ、自然と自分なりに納得のいくものができるようになったのだと思います。それでも父がいてくれるうちはまだ甘えていたんですね。父が亡くなって、これは大変なことだと初めて分かったんです。そこから仕事に打ち込む姿勢が大きく変わりました。それが今から25年ほど前、40歳になったころです」

雨畑硯の伝統を守る、職人の信念。

「硯で墨をすって筆で書く文化が全盛だった父の時代を知る私は、今のような時代が来るとは夢にも思っていませんでした。時代の流れの中で、中国から硯や墨などがたくさん入ってきたこともあり、私たちの伝統的な硯産業は下火になっていきました。書道人口はまだ多いとはいえ、墨汁が使われることで硯で墨をする人は減ってきましたし、学校の習字の授業でも墨をする時間がないのが現実です。父が亡くなり本格的に家業を引き継いでからは、まさに激動の時代でした。しかし、ここで雨畑硯の伝統と文化を絶やすわけにはいかない、そんな信念の下、今日まで頑張ってきているわけです」

峯硯堂本舗

富士川町鰍沢5132／TEL.0556-27-0209

甲州銘石雨畑硯製造本家 峯硯堂本舗 代表

雨宮 正美さん

硯を使う文化と伝統技術を次世代に。

「硯を使った人が喜んでくれる、これが一番大切なんです。使ってもらってその価値を分かってほしいので、店に来てくれたお客さんとは本音で話をしますし、実際に硯で墨をすってもらいます。本物を感じ取ってくれる人がいることは職人としての喜びなんです。しかし職人の数は減り続け、後継者の育成も課題です。ものづくりは職人の魂を込めるものですから、好きだから作りたいという強い気持ちを持って職人を目指す人が来てくれたら、喜んで教えたいですね。

伝統を守っていくために、硯を使う文化を育む必要もあると思っているので、子どもから大人までを対象にした硯作りの体験教室も開いています。体験とはいえ石を彫るのは大変な作業だからこそ忘れられない思い出になり、硯への興味につながると思います。先日も、子どもの頃体験教室に来た方が、店に訪ねて来てくれたんです。本当にうれしかったですね。これからも雨畑硯職人としての誇りを胸に、受け継がれてきた伝統文化を次世代につなげていきたいと思っています」